

文明論の概略 緒言

鴨川義塾第25回 2007.1.20

高崎経済大学名誉教授 飯岡 秀夫

大意

初めに「文明論」とは何かについて言っておこう。「文明論」というのは人の「精神発達」の議論である。しかも、単に「精神発達」の議論にとどまらず、人の「衆心発達」の議論なのである。

次に、「今、何故、『文明論』を論じなければならないか」について述べておこう。それは、王制の一新、廃藩置県に端を発する、人心の騒乱がますます甚だしくなっているからである。しかし、この人心の騒乱なるものは全国人民が文明に進もうとする発奮である、という側面を持っている。それゆえ、人心の騒乱を治め、全国人民が正しく文明の道を進んでいくことが出来るように「文明論」を論じ、もって「条理の乱れざるもの」を追求する事が肝要なのである。

「条理の乱れざるもの」を追求するというこの課題は学者に課せられた義務である。しかしそれは学者においては「至大至難の課業である」、と言わなければならない。何故なら、彼我（西洋と東洋・日本）の文明は「文明の元素」を異にし、その「元素の発育」を異にしているからである。「文明の元素」をことにする彼我の文明は、いわば、火と水のごとく溶け合うことは難しく、従って、火を水に転ずるという課業は「改新」というよりは「始造」と言わなければならぬほどに、至難の業なのである。

とはいえ、他方、我々には偶然の僥倖がある。それは我々が「一身にして二世を経る」という経験をしたことである。「形影の互いに反射するをみれば、その議論必ず確實ならざるをえざるなり 6頁参照」。「日本全国の面を一新せんことを企望して」、さあこれから、「文明論」を論ずる事にしよう。

議論

1. 「精神発達」の議論
2. 「衆心発達」の議論
3. 「条理の乱れざるもの」
4. 「文明の元素」
6. 「一身にして二世を経る」

第1章 議論の本位を定める事

大意

自説（自分の論議・主張）を展開するにあたって、忘れてはならない最も大切な事は「議論の本位を定める事」である。「議論の本位を定める事」という事は議論（自説）を支える自分の立場（究極の価値理念）・問題意識・テーマを明確にし、それを自己限定することである。ちなみに、これから展開する自説（文明論）の「議論の本位」を示せば、「前に進まんか、後ろに退かんか、進みて文明を遂わんか、退て野蛮に返らんか」我切実に問われている時に当たって、進みて、「西洋の文明」を目的とする、さらにいえば、進みて「一身の独立一自国の独立」を目的とする立場に立つ、と言う事である。私の文明に関する議論はその立場にたつ議論なのである。

何故議論の本位を定める事がかくも大切であるかといえ、本来「相対性」を原理とする文明社会にあつては、本位を定めない議論は不毛に終わるからである。百姓と市民の、古風家と改革家の議論がその例である。「その状況恰も双方の匹敵各片眼を閉ざし、他の美をみずしてその醜のみを覆うものの如し」。議論というものは片目をつぶってはいけけないのである。両目を開けていなければならないのである。議論の本位を定めることによって、初めて、両目を開けた議論が出来るのであり、両目を開けて議論してはじめて相手の長所を見る事が出来るのである。お互いがお互いを生かし合うことができるのである。

議論の本位を定めての、両目を開けた議論こそ「人と人との交際」を支えるものである。そして文明なるものは、そのような、「人と人との交際」における「多事争論」のなかで進歩発展していくものなのである。その事をもう少し詳しく論じておこう。

人間というものは、各自、本来の「真面目」を生得的にもって生まれてきているものである。文明というものは、各人が各自に持つ本来の「真面目」を発揮する中で進歩発展していくものなのである。各人が各自にもつ本来の「真面目」は如何にして発揮されるかという、「人と人との交際」における「多事争論」—議論の本位を定めての両目を開けての議論—の中でなのである。

本来、各自の持つ価値理念・それに基づく立場は相対的なものである。立場・価値理念が相対的なものであるからこそ、議論の本位を定め、両眼を開いて、議論する必要があるのである。自分の立場・価値理念だけが唯一絶対的に正しいとして、それを他に押し付けようとする議論は不毛であり、文明の精神に反するものである。そこにあつては「人と人との交際」もそこにおける「多事争論」も成立せず、従つて、「多事争論」における「本来の真面目」の発揮しあいも望むことが出来ないのである。そのことと関連して、最後に、一つだけ付け加えて論じておきたいことがある。

「一世の人民を視るに、至愚なる者も甚だしく至智なる者も甚だ稀なり。」世の中に多いのは智愚の中間に居る者であつて、彼らの所見が天下の議論（世論）を形成している。現今の日本にあつては、この輩の所見が天下の議論を統一し、「僅にこの画線の上に出るのがあれば即ちこれを異端妄説と称し、強いて画線のうちに引き入れて天下の一直線の如くならしめん」としている（18-9頁）。どんなつもりなのか、ここにこそインテリ（智者）の役割が期待される。「古来文明の進歩、その初めは皆所謂異端妄説に起こらざるものなし」。昔の異端妄説の謗りを恐るることなく、勇を振て我思う所の説を吐くべし。ただしその際、「議論の本位を定める事」を忘れてはならない。くれぐれも、「他人の説を我範囲内に籠絡して天下の議論を画一ならしめんと欲するなかれ」。

議論

1. 「議論の本位を定める事」
2. 「相対性」を原則とする文明社会：「価値理念の相対性」
3. 片目をつぶった議論と両目を開けた議論
4. 「人と人との交際」
5. 「多事争論」
6. 本来の「真面目」
7. 智愚の中間に居るもの
8. 智者の役割